



海上保安庁

特殊救難隊

18 TAKUYA.S

日本の領土面積(約38万km<sup>2</sup>)は世界で61位にすぎませんが、領海および排他的経済水域の面積は約12倍(約447万km<sup>2</sup>)と広大です。国民が安心して海を利用できるように、その広大な海域を守るために日夜従事しているのが海上保安庁の職員です。

全国で約1万4000人の海上保安官のうち、1%にも満たない約1200人の潜水士の中から選ばれた、特に高度な救助技術と専門的知識を必要とする「特殊海難」に対応する救助のスペシャリストが「特殊救難隊」(通称・特救隊)です。

特救隊は、基地長のもと統括隊長ほか1隊6人×6隊(合計37人)で編成され、羽田にある特殊救難基地からジェット機やヘリコプターで救難現場に向かい、潜水による転覆船・沈没船内からの救助、ヘリコプターを使用した漂流者や疾病者などの救助、危険物積載船の火災・爆発の鎮火、毒物などの危険物により汚染された環境下の人命救助などの「特殊海難」に365日24時間体制で対応しています。

この選りすぐりの少数精鋭部隊に所属している鶴ヶ島出身の佐藤卓也さんに、日本の海を守る思いを聞きました。

―海上保安庁に入ろうと思ったきっかけを教えてください

母方の実家が新潟県の柏崎市にあり、毎年海へ遊びに行くのが楽しくて、昔から海で仕事がしたいと思っていました。

高校1年生の授業の時に、すでに将来希望する職業として「海上保安官」と書いていました。当時、「海の職業」と調べたら、漁師と海上保安官の2つしか出てこなくて(笑)。野球もやりつつ、漠然とではありましたが、海上保安官になれたらいいなと思っていました。

―なぜ潜水士を目指したのでしょうか

高校2年生の時に「海猿」という映画があり、潜水士という仕事があることを知りました。私は船に乗ったり、クルージングをするよりも、海に潜ることが好きだったので、潜水士だったら海に入れるなど(笑)。それが潜水士を目指したきっかけです。

大学ではライフセービング部に所属し、トレーニングを中心に、海水浴場のパトロールや安全管理などを行っていました。大学生の時には、海上保安官になることが具体的な目標になっていました。

# 「最後の砦」

## 海上保安庁 特殊救難隊

# 佐藤 卓也

Sato Takuya

1987年12月生まれ。2003年西中学校を卒業、2010年海上保安庁に入庁し、第九管区海上保安本部(新潟県など)を経て、2016年羽田特殊救難基地特殊救難隊に配属。  
175cm、70kg

―部活の先輩などから、いろいろな話を伺っていたところ、「特救隊」という部隊があることを知りました。面白そうだなと思い、目指し始めました。

―大学の時にすでに、潜水士よりもさらに難関な特救隊を目指していたのですか

目指してはいたね。海上保安庁に入るのであれば、絶対に特救隊に入ろうと。部活で走り込みや泳ぎ込み、救助指導などを一生懸命やりながら、「人の役に立ちたい。社会に貢献したい」という思いがより一層強くなっていったということもあると思います。大学の頃の充実した経験があったからこそですね。

―特救隊はどのような訓練をするのでしょうか  
潜水士の訓練とは全然異なるものです。特救隊は、潜水士だけでは対応が困難である、特殊な救難現場に行きます。何が起るか分からないということが一番の違いです。そこから緊急脱出するための訓練を行います。

―特救隊が設立されてから44年ほどの歴史がありますが、殉職者は今まで一人もいません。それは、これまでの先輩方の努力や経験によって積み重ねられてきた訓練を徹底的に行ってきたことによるものです。

―高度な救助をするための体力、知識はもちろんのこと、適切な判断力を養うことも大切です。生きて戻る術と、自分の限界をしっかりと理解すること。自分の限界を超えてしまえば、自分が要救助者になってしまいます。それは絶対に無いように心掛けています。体力は訓練で強くなっていきます。しかし、知識は自分でしっかりと理解しながら、不明点を解消していかねばなりません。私が特救隊に配属された時は、6か月間の訓練期間だったのですが、その間の休日は予習と復習で、とにかく勉強機に向かっています。もうずっとです(笑)。すべての時間を勉強のために費やしました。



横浜海上防災基地での潜水訓練



崖を使った要救助者救助訓練

― 特救隊員にはどのようにしたらなるのでしょうか

毎年、全国の潜水士の中から5人程度が選ばれます。体力だけでなく、技能や精神力、知識、リーダーシップ、人間性などの総合的な適性を判断され、特救隊に認められると隊員になれます。

― 日頃どのようなスケジュールですか

当直の日は、羽田の特救救難基地に24時間待機しています。出動が無い時間は、主に事

務作業を行っています。様々な事務をしながら、出動があれば中断して救助に向かいます。

この事務が膨大にありまして、なんとか終わらせています(笑)。当直の日以外は、施設や屋外で、レンジャーや潜水、救急、火災・危険物事故対応の訓練などを行っています。

― 一年間の出動件数や、主な救助内容は

隊全体としては、150件から200件くらい救難現場に出動します。そのうち、私たちの部隊は30件程度ですね。

救助範囲は日本全国の海域ですので、かなりの広範囲です。また、任務は火災、ヘリコプターから降下しての救助、潜水、陸上の救助、最近でいうと生物化学兵器などのテロ対策もありますので、内容も広範囲です。

陸上で救助を行うこともあります。国の機関として自発的に出動したり、都道府県知事から災害派遣要請を受け、水害などによって孤立した方をヘリコプターで避難場所などに運ぶのが主な任務です。最近では、先日の台風19号の際に、茨城県に出動しました。

救助の場所で一番多いのは遭難船舶の上での救助ですね。グラグラと揺れている船や、まだ火災がくすぶっている船などです。沈没船や転覆船内の捜索などもあります。そのような危険な救難現場に行ったとしても事故を起こさないような準備をしていますし、安全に要救助者を救助するための訓練を日々行っています。

### 恐怖心を超えて救助に

― 怖くないのでしょうか

めちゃくちゃ怖いですが(笑)。恐怖しかなかった。

救助に向かう航空機の中で、事前に転覆や沈没した船の設計図を確認します。日本の船であれば、だいたい分かれます。その図を基に、どこの区画をどう捜索しようかというのを十分に打ち合せてから救助に行きます。実際の現場は水中視界もほとんどないですし、自分の腕時計の時間が見えないくらいのは普通にあります。



特救隊のすべてが詰まった「降下器」

今年あった沈没船では、私たちの隊が出動し、要救助者を発見したのですが、その時もほとんど視界がありませんでした。さらに流れがものすごく速く、ロープ一本の命綱を持っていて、手を離したらおそらく出てこれないくらいの迷路でした。なおかつ、船が横倒しになっていて、海底の流れが激しかったため、船が反対にひっくり返ることも考えられました。もしそうなった場合、一か所しかなかった入口が塞がれて、出口が無くなり、帰ってこれなくなる可能性があります。

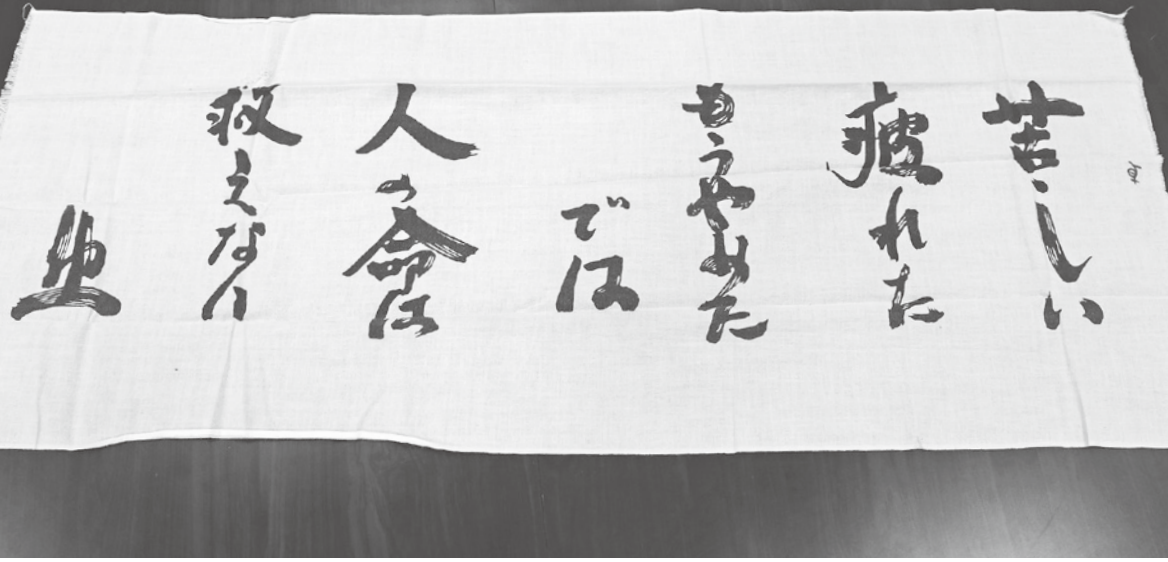
― 今まで最も印象に残っている現場は

一番最初に生きている方を救った出動ですね。1月後半くらいに極寒の夜、東京湾で漁に出た船で、故障により遭難してしまつた80歳くらいのおじいちゃんでした。出動するようになってから、3か月後くらいです。それはすごうれしかったですね。生きている方を救う事は、潜水士ではほとんど無いことですから。

海は陸上と違い、私たちが現場に到着するまでに時間を要しますから、亡くなっている方も多いいです。

特救隊の皆さんが  
常に身に付けている  
手ぬぐい

苦しい  
疲れた  
もうやめた  
では  
人の命は  
救えない



### 残されたご家族の心も救いたい

— そのような辛い救難現場でのお気持ちは、その方のためにという思いが大きいですが、ご家族のためにという思いが大きいのです。時間が経った後に、ご家族の元に戻してあげているのと、そのまま見つからないのでは、その後の悲しみが絶対に違うと思うんです。どのような状況の方であっても、救助に行く気持ちは変わりませんし、必ず助けたいと思っています。

ただ、残念な結果であったとしても、正面から向き合い、私たちの救助の方法に何か改善できることはないか、次は生きている方を生きたまま戻してあげられるようにするにはどうしたらよいかと、考えています。

特救隊としても、最善の方法を常に皆で話し合いながら、その後の訓練や救助に活かしています。

— 特救隊としての心構えはありますか

特救隊に配属されて渡された手ぬぐいに書かれた言葉ですね。特救隊員全員がオレンジの制服の中に持っています。皆、この言葉を常に意識して日々の任務にあたっています。私たちが救助に行かなければ、もう他に誰も助ける人はいないという重みを背負っていますから。

実際に大変だと感じることはありませんが、ずっと苦しい状況が続くことはなかなか無いと思うんです。だからその一瞬の苦勞に耐えられなければ、この先にあるかもしれない長い苦勞があった場合に、絶対耐えられないだ

ろうと思っています。

また、他の海上保安官と特救隊が違う点は、少数で一つの作業を完結させるところです。最大で6人です。どのような現場でも6人でやり遂げなければなりません。一人の判断がひいては隊全体としての判断になります。自分の判断一つで、人の命が左右されるのももちろんのこと、組織としての判断になりますので、生半可な考えで下すことはできません。他の部署には無い、貴重な経験をさせてもらっています。大きな責任がありますが、その分やりがいがあります。

— 大切にしていることはありますか

奥さんが作ってくれたお守りですね。可愛くないですか？(笑)。必ず胸ポケットに入れて出勤しています。

自分一人のために働くのと、家族の存在があって働くのとでは、やはり違いますね。

いろいろと支えてもらっていますし、感謝しています。

独身の時よりも仕事に対する心構えの点で、プラスになっています。いい意味で怖がるようになりました。自分が死んではいけないと。今年、子どもが生まれる予定なんです。さらに死ねないと思っっています。子どもが生まれたら、勤務中以外の時間で、積極的に子育てをしたいと思っています。

— これからの夢を教えてください

海上保安庁には、日本の技術を海外へ伝える役割もあります。今後は、広い視野を持ち、これまで培った特殊救難技術を、庁内だけでなく外部へ伝えていくことにも興味があります。現在は、特救隊としての勉強だけではなく、海外でも任務に就けるよう、英語の勉強なども始めています。

また、今の特救隊ですと緊急出動があるので、なかなか鶴ヶ島に行くことが難しいですが、市内の小中学校で着衣泳などの水泳の授業があれば、いつかやってみたいですね。

— 市民の方々にメッセージをお願いします

鶴ヶ島から海に行くというと、マリネリジャーの方が多いと思います。しっかりと海の危険性を意識し、事故を起こさないように楽しむことが大切です。

特に親御さんから子どもたちへ、海は楽しいだけではなく、危険もあることをしっかりと伝えてあげてほしいです。それが大切な命を守ることに繋がります。

もし万が一、海で何かあった時には、ためらうことなく海上保安庁に連絡をください。『海のもしものは118番』です。

我々、海上保安庁が必ず駆け付けます。



奥様お手製のお守り

